MIYAGI みやぎ県政だより
2023 3・4 月号

ページ

新・宮城の将来ビジョンシリーズ
2 PROGRESS ～ともに創ろう、躍進する宮城の未来～
NPO法人わたりグリーンベルトプロジェクト（亘理町）

特集1
4 みやぎ・復興の歩み

特集2
6 みやぎ結婚&子育て応援パスポート

県政ニュース
8 ストップ!特殊詐欺被害
～みやぎ、特殊詐欺被害ゼロへ～

9 「みやぎ県政だより」アンケート調査の結果

10 7つの地域から虹メール

12 お出かけガイド

14 おいしいものがたくさん!
まんぷくみやぎ

15 みやぎのふるさと通信（女川町・加美町）

16 県立施設インフォメーション

17 新型コロナウイルス感染症に関するお知らせ

18 県からのお知らせ

みやぎの人口（令和4年12月末現在）

住民基本台帳人口	2,257,481人	世帯数	1,035,950世帯
男	1,101,032人	※うち、外国人住民基本台帳人口は24,098人です。	
女	1,156,449人		

今号の表紙
「育樹活動」真っ最中!

当ページで取材したNPO法人わたりグリーンベルトプロジェクトが、海岸林の維持管理作業を行う様子です。この日はスタッフ5人が約3時間かけて、マツに絡んだツルの除去を行いました。地道で大変な作業ですが、精悍（せいかん）な顔つきで取り組む皆さんの姿が輝いていました。

仙台・宮城観光PRキャラクター むすび丸

新・宮城の将来ビジョン シリーズ
PROGRESS
ともに創ろう、躍進する宮城の未来

第10回

多様な自然の再生と持続可能な森づくりを目指して

NPO法人わたりグリーンベルトプロジェクト（亘理町）

本シリーズでは、県政運営の基本方針「新・宮城の将来ビジョン」において重要な視点として位置づけている「人づくり」「地域づくり」「イノベーション」「SDGsの推進」に焦点を当て、各分野で魅力ある活動に取り組む県内の企業・団体などを紹介しています。

【写真の説明】1 平成30年の植樹祭の様子　2 取材日に維持管理作業を行っていた皆さん　3 昨年11月開催の育樹会に参加した皆さん　4 ボランティアツーリズムでガイドを務める東さん（写真右）　5 盛り土上に自然発生したハンノキ林での生き物調査　6 砂浜の生き物調査でスナガニの巣穴を掘る男の子

宮城県および亘理町と「みやぎ海岸林再生みんなの森林づくり活動協定」を締結し、海岸林の再生に取り組むNPO法人わたりグリーンベルトプロジェクトの代表理事東聖史（ひがしまさふみ）さんにお話を伺いました。

―団体設立の経緯は？

平成23年の東日本大震災により、350年以上の歴史を誇る亘理町の海岸林は大きな被害を受けました。「おらほ（私たち）の森を自分たちの手で復活させたい」との思いから、町民主体の海岸林再生プロジェクトが同年秋に始動しました。団体がNPO法人になったのは平成27年のことです。

―主な活動内容は？

発足当初は苗木作りや普及啓発が主で、育てた苗木を植える活動が平成27年に始まりました。地域内外から多くの温かいご協力をいただき、5年間で協定面積14・1ヘクタールにクロマツやアカマツ、コナラなど、約4万4千本の苗木を植樹しました。

植樹後の適切な維持管理

植樹したマツが防潮林として十分な高さ（約15メートル）になるまで、早くても20年程かかります。その間、マツの生育を妨げる植物の除去や計画的な間伐など、適切な維持管理を続けていかなければなりません。

一方で、令和2年に実施した生育調査の結果、一言で「植樹地」といっても、盛り土や周辺環境の違いによって、木の生育状況や景観が大きく異なることも分かりました。今後は、それぞれの場所に合った管理・活用手法を継続的に模索していく必要があります。

多様な自然の魅力を紹介

現在の海岸林には、植樹したもの以外にも、それぞれの土地に合った植物が多く自生していて、そこに集う鳥や虫などの生き物もさまざまです。

当団体では、海岸林や砂浜など、多様な自然から成る沿岸部の魅力を多くの方に知ってもらうため、誰でも参加できる自然観察会を定期的に開催しています。参加者の方からは「こんなにいろんな生き物がいるなんて知らなかった」「海岸林ってすごいんだ」といった声が聞こえてきます。

また、発足当初から続くボランティアツアーの受け入れや、近隣小学校での出前授業なども行っており、さまざまな機会で沿岸部の魅力や課題を伝えています。

こうした一つ一つの地道な取り組みが、これからの持続可能な森づくりを前に進めるきっかけになると私は信じています。

―今後の展望は？

海岸林は昔から、強い海風や高潮から沿岸地域の暮らしを守ってきました。それと同時に、高度経済成長期以前は、海辺の里山として人々が積極的に松林を管理・活用していました。つまり、当時の海岸林と人はまさに持ちつ持たれつ、win-win（ウィンウィン）の関係を築いていたのです。これからの森づくりは、そんな両者の良好な関係を再構築するものでなければならないと考えています。

今後は、多様な沿岸環境の魅力を、そしてこの活動をより多くの方に知ってもらい、地域の自然を生かした森づくりの発展につなげていきたいです。

育樹会も自然観察会も、ご参加いただく上で専門的な知識や技術は全く必要ありません。とにかく気軽に、自然の中での活動を楽しんでいただけたらうれしいです。

NPO法人
わたりグリーンベルトプロジェクト
代表理事　東　聖史さん

知事コラム 村井が走る

次に備えて

昨年5月に、国から示された新しい巨大地震断層モデルなどをベースに最大クラスでの津波が悪条件下で発生した場合の津波浸水想定区域を公表しました。津波被害を受けた沿岸の15市町のまちづくりがほぼ完了し、新しい場所に家や工場が建ち始めたタイミングで、巨大津波によってまた浸水する可能性があると公表されたわけですので多くの被災者の皆さんが戸惑ったのも当然のことと思います。本来なら今後考えられる最大限の津波被害が判明した時点からまちづくりをするべきです。しかし、待ったなしの復興のため、東日本大震災のあった年の秋に国・県・沿岸市町の間で今回と同じ規模・条件での津波を想定したまちづくりを進めることになりました。そして将来想定される巨大な津波に対しては安全な避難を目指すことになったわけです。この考えは宮城県だけでなく福島県も岩手県も同じでした。その後、国において平成27年1月から日本海溝沿いなどの新たな巨大地震断層モデルの検討が始まり、令和2年4月に結果が公表されましたので、復興したまちに当てはめてシミュレーションした結果を昨年5月に発表しました。東日本大震災前は、1960年にあったチリ地震津波を想定した「経験に基づく対策」しか行っていませんでした。それによって甚大な被害が出たことを教訓に、批判を恐れず今考えられる最大限の浸水想定区域を発表しました。次に備えてどんなことがあっても命を守れる態勢を構築すると心に誓っています。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

宮城県知事 村井嘉浩